

第33回

## 篠笛を吹こう ～楽しく演奏 (3)～

### 学習のねらい

「楽しく演奏」シリーズ、今回は日本独自の楽器である「篠笛」を取り上げます。「篠笛」は、古くから神楽や獅子舞、祭りのお囃子などで使われてきた横笛で、長い間私たちの生活の中にある楽器として親しまれてきました。いろいろな場面で実際に演奏しているところを見聞きしたことがあると思います。皆さんもぜひ「篠笛」に挑戦して日本の音色に親しんでほしいと思います。今回はゲストに邦楽囃子笛方で、篠笛の演奏家の福原徹さんにお越しいただきました。



講師  
末石 忠史

### 篠笛の構造とその種類を知り、基礎的な奏法を身に付ける

篠笛は篠竹の管の片方（頭部）をふさぎ、孔あなを開けた素朴な形をした楽器です。篠笛の頭部には漢数字が書かれていて、楽器の音域（すなわち大きさ）を示しています。最も大きいものには「一」と書かれ、この楽器のことを「一本調子」と呼びます。「八」と書かれていれば「八本調子」ということになります。「一」から「十二」まで、全部で12種類ありますが、唄や三味線などの音の高さに合わせて大きさの違う篠笛を使い分けます。

篠笛の音を出すためには、吹き方が重要です。歌口が左側にくるように構え、楽器が自分の右になるよう持ちます。そして、笛が水平になるように構え、歌口を下唇の下側にしっかりと当て、口を横に引くようにして、唇の真ん中からフーと長く息を出します。息の角度や強さを変えたりしながら練習をしてみましょう。

今回番組で使用した七孔の篠笛には、歌口から少し離れたところに指で押さえる「指孔」と呼ばれる孔が7つ開いています。息を吹き込む歌口に一番近い孔から順に、左手の人差し指、中指、薬指で押さえ、次に右手の人差し指、中指、薬指、小指で押さえます。指孔のふさぎ方を変えたり、息の速さを変えたりすることでいろいろな高さの音を出すことができます。

### 篠笛の音色や響きを感じ取り、イメージをもって表現を工夫する

祭りや獅子舞のときに聞かれる篠笛の甲高い音があります。番組では「通り神楽」を紹介します。この音域の音を聞くととてもワクワクした気持ちにさせられます。篠笛は2オクターブ半ぐらいの音域がありますが、一番低い音から1オクターブ上までの音域を「呂」、その1オクターブ上の音域を「甲」、さらにその上の高音域を「大甲」と呼びます。

この「呂」「甲」「大甲」は息の加減で吹き分けます。また、篠笛の特徴的な奏法として「打ち指」があります。打ち指を使って音を区切ったり、音を装飾したりします。篠笛だけでなく日本の横笛では原則としてタンギングを使用しません。

## 篠笛の音色や表現の豊かさを味わう

ゲストの福原徹ふくはらとほるさんが演奏される「明の鐘」あけかねを聴いて、篠笛の音色や表現を味わってみましょう。

### ワードファイル

#### ■日本の「笛」について

「笛」という字には、「たけ（竹）かんむり」が入っていますが、日本の「笛」のほとんどは竹製のものです。今回取り上げた篠笛のほかに、雅楽の「籠笛りゅうてき」、能楽の「能管のうかん」などがあります。「能管」には「喉のど」と呼ばれる構造があり、独特の音程を出すことができるようになっていて、能楽特有の幽玄の世界を表現します。また、竹製の縦笛には「尺八」があります。尺八は竹の筒を切り出して指孔を開けただけの簡単な構造で、息を入れる歌口の部分が斜めに切り落とされています。素朴な構造ですが、「ムラ息」や「コロコロ」など尺八独特の奏法が多数あり、独自の世界観が表現できる楽器です。

### ♪ 今回取り上げる曲 ♪♪

- 長唄「越後獅子（えちごじし）」冒頭部分 : 作曲・九世杵屋六左衛門
- 「ほたるこい」 : わらべうた
- 長唄「明の鐘」 : 作曲者不明